

ヨハネ「福音書」における「裁く／裁き」

川崎医療福祉大学 共通科目担当

佐々木 寛 治

(平成15年11月14日受理)

κρίνω/κρίσις im Joh. „Evangelium“

Kanji SASAKI

*Beaufragte mit allgemeinbildenden Fächern,
Kawasaki Universität von Medizinischer Fürsorge
Kuraschiki, 701-0193, Japan
(Received on November 14, 2003)*

概 要

A: わたしが来たのは世を裁くためではなく, 世を救うためである (ヨハ12.47b)。

B: わたしはこの世を裁くために来た (ヨハ9.39a)。

このような「矛盾」をどう理解したらいいだろう。

イエスの道は, 結果から, しかも第一位格の働きにおいて見られるとき, この世を裁いてしまっている。イエスの名を信じない者は, すでに裁かれてしまっているのである。

キーワード: ヨハネ「福音書」, 終末論, 裁き

Resümee

A: denn ich bin nicht gekommen, daß ich die Welt richte, sondern daß ich die Welt rette (Joh. 12,47b).

B: ich bin zum Gericht in diese Welt gekommen (Joh. 9,39a).

Wie dürfen wir diesen „Widerspruch“ verstehen?

Der Weg Jesu hat diese Welt schon gerichtet, wenn er nach seinem Resultat und in den Wirkungen des ersten Persons betrachtet ist. Wer an den Namen Jesu nicht glaubt, der ist schon gerichtet.

Key words: Joh. „Evangelium“, Eschatologie, Gericht

問題の所在

ヨハネ「福音書」には動詞「裁くクリノー」は19例, 名詞「裁きクリシス」は11例出現しているが, そこには看過しえない矛盾が存在する。下記のA項ではイエスは「世を裁くために来たのではない」と語られ, B項では「世を裁くために来た」と語られる。これをどう理解するかを考察の課題としたい。

本小論は、「裁き」の本質論や概念史をめぐる議論に深入りすることを避けつつ、「ヨハネ神学ではなぜ、上記のような矛盾しているかのごとき語りが出現するのか」を、「裁きの時間論」ともいべき視座に方法を限定し、考察する。その際、テキスト本文に出現する術語用法の具体例をできるだけ多く提示することに固執したいので、小論の叙述はメモふうのものとなることを許されたい。

何よりもまず、矛盾しあっているかに見える両項を対比しておこう（以下では、ヒナ従属節とエイズ前置詞句という文法形式の相違そのものに意味論上の特段の区別を見ない、というレベルで論じることにする）。

A :

^{3:17} *οὐ γὰρ ἀπέστειλεν ὁ θεὸς τὸν υἱὸν εἰς τὸν κόσμον ἵνα κρίνη τὸν κόσμον, ἀλλ' ἵνα σωθῆ ὁ κόσμος δι' αὐτοῦ.*

^{3:17} 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく [世を裁くために遣わされたのではなく]、御子によって世が救われるためである。

^{12:47} *καὶ ἐάν τις μου ἀκούσῃ τῶν ῥημάτων καὶ μὴ φυλάξῃ, ἐγὼ οὐ κρίνω αὐτόν οὐ γὰρ ἦλθον ἵνα κρίνω τὸν κόσμον, ἀλλ' ἵνα σώσω τὸν κόσμον.*

^{12:47} わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。わたしは、世を裁くためではなく [世を裁くために来たのではなく]、世を救うために来たからである。

B :

^{9:39} *καὶ εἶπεν ὁ Ἰησοῦς, Εἰς κρίμα ἐγὼ εἰς τὸν κόσμον τοῦτον ἦλθον, ἵνα οἱ μὴ βλέποντες βλέπωσιν καὶ οἱ βλέποντες τυφλοὶ γένωνται*

^{9:39} イエスは言われた。「わたしがこの世に来たのは、裁くためである [世を裁くためにわたしは来た]。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

1. ヨハネ「福音書」に内蔵された「未来終末論」

日常的な「裁き」も、その根幹は終末時の「裁き」の在り方に規定される。ヨハネ「福音書」の終末論は現在終末論であるとふつう語られるが、それは未来終末論のたんなるアンチとしてなのではなく、かえってこれを内蔵しているのである。

1.1 マタイにおける未来終末論

「人の子が来るとき ホタン・エルサー・ホ・ヒュイオス・トゥー・アンスローパー」

マタ^{25:31} 「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。マタ^{25:32} そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け（アフォリゾー）

マタ25:33 羊を右に、山羊を左に置く。
 マタ25:46 こうして、この者どもは永遠の罰を受け、
 正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。」

「裁きの時[裁きの場に立って] エン・テー・クリセイ」

マタ12:41 ニネベの人たちは裁きの時，今の時代の者たちと一緒に立ち上がり，彼らを罪に定めるであろう。
 ニネベの人々は，ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに，ヨナにまさるものがある。
 マタ12:42 また，南の国の女王は裁きの時，今の時代の者たちと一緒に立ち上がり，彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために，地の果てから来たからである。ここに，ソロモンにまさるものがある。」// ルカ11,31-32

「裁きの日に エン・ヘーメラ・クリセオース」

マタ10:15 はっきり言っておく。裁きの日には，この町よりもソドムやゴモラの地の方が軽い罰で済む。」
cf. マタ11,22.24

1.2 ヨハネ「福音書」における未来終末論

5:24 はっきり言っておく。

わたしの言葉を聞いて，わたしをお遣わしになった方を信じる者は，

永遠の命を得ている，

また，裁きに来ることなく，

死から命へと移ってしまっている。

5:25 はっきり言っておく。

時が来る，今やその時である ἔρχεται ὥρα καὶ νῦν ἐστίν，

死んだ者が神の子の声を聞き，

聞いた者は生きるだろうところの。

5:26 なぜなら父は，御自身の内に命を持っておられるように，

子にも与えられたからである，自身の内に命を持つことを。

5:27 また，子に与えられた，裁きを行う権能を。

子は人の子だからである。

5:28 驚いてはならない。

時が来る ἔρχεται ὥρα,

墓の中にいる者が皆、彼の声を聞き,

5:29 そして出てくるであろうところの

善を行った者は復活して命を受けるために、

悪を行った者は復活して裁きを受けるため。

↑

[聞く] の高さ

↑

[命を得る] の高さ

↑

[裁き] の高さ

5:24 現在終末論 → 5:25 未来終末論 + 現在終末論 → 5:26 未来終末論と、歩一歩と着実に、語りは未来終末論が支配する読者の生活世界へ降下している。

注目すべきことは、内蔵された未来終末論の視点からは、ヨハネ「福音書」のイエスは、共観福音書のイエスと同様に「この世を裁く」ために地上を歩まれるのである。ヨハネ「福音書」のテキストは共観福音書のテキストを、意識的にかつ批判的に内蔵して、編み上げられているからである。未来終末論が現在終末論へと進展するにしたがって、古いテキストは解き放たれ廃棄されていき、いよいよこの世への愛が浮かび上がってきて、「この世を救うための歩み」が鮮明となってくる。そのことが「終わりの日に」という術語が提示するスキーマの変移として現れている。

「終わりの日に [エン]ター・エスカター・ヘーメラー」

未来終末論 (ヨハネ「福音書」前半部の物語構成では6章は、〈終末を未来に展望する谷間〉である)

6:40 わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである。cf. 6,39.44.54

11:24 マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と言った。

未来終末論 + 現在終末論 (ヨハネ「福音書」前半部の物語構成では7章は、〈終末が未来から到来する、その始点〉である)

7:37 祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。

「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」(もちろん祭りの「終わり」が終末のそれと重ねられている)。

現在終末論 (ヨハネ「福音書」前半部の物語構成では12章は、〈すでに受苦され始めている終末としての現在〉である)

12:48 わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。

わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。

1.3 以上に関連する限りでの、パウロにおける未来終末論

ロマ02:16 そのことは、**神が**、わたしの福音の告げるとおり、人々の隠れた事柄をキリスト・イエスを通して**裁かれる日に**、[エン・ヘーメラ・ホテ・クリネイ・ホ・セオス] 明らかになるでしょう。

1コリ04:05 ですから、**主が来られるまで** [ヘオース・アン・エルセー・ホ・キューリオス] は、先走って何も裁いてはいけません。主は闇の中に隠されている秘密を明るみに出し、人の心の企てをも明らかにされます。そのとき、おのおのは神からおほめにあずかります。

1コリ15:26 最後の敵として、死が滅ぼされます。

1コリ15:52 **最後のラッパが鳴るとともに**、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。

1.4 so as to judge & in order to judge

ヨハネ以前の言語系における「終末論」が語るところによれば、人の子の来臨において人間はまず人の子の前に立ち、次にこの面前で右と左に分けられる。ヨハネの「終末論」では、人の子の前に自覚的に立つ者はすでに永遠の生命に移されているのである。

逆に言えば、到来する／している人の子（復活のイエス・再臨したらんとするイエス）が「見えない」者、信じられない者はすでに永遠の滅びに渡されているのである。人の子なしで、律法の前に自分だけの力で義しく生きられると自ら**判断する**（クリノーする）ことが、とりもなおさず罪の**判決を受けている**（クリノーされている）こと——主観的な幻想の底に厳然と口を開けている地獄に墮していること——の明白な証拠なのである。この理路はヨハネ神学に極めて特徴的なことであるが、すでにルカが表出した言語系の中に出現していたのである。

使13:46 そこで、パウロとバルナバは勇敢に語った。「神の言葉は、まずあなたがたに語られるはずでした。

だがあなたがたはそれを拒み、自分自身を永遠の命を得るに値しない者**にしている** [ウーク・アクシウース・**クリネテ**]。見なさい、わたしたちは異邦人の方に行く。

それはさらに遡り、パウロ神学にも孕まれていた。

ロマ02:01 だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない。あなたは、他人を裁きながら、

実は**自分自身を罪に定めている** [セアウトン・**カタクリネイス**]。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです。

人間が自ら志して（=in order to）裁くのではないが、知らず悟らずに結果として（=so as to）裁かれてしまうこと。このような神学の前進深化としてヨハネの言語系がある。

そこでは、神の独り子イエスが自ら意図して（=in order to）裁くのではないが、彼の愛と恵みの絶大な富への「無知・無自覚・無関心」にたいして、結果として（=so as to）彼は人間を裁いてしまうこととなるのである。

ヨハ3:16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

ヨハ3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

ヨハ3:18 御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に「裁かれている」[ヘーデー・ケクリタイ]。

神の独り子の名を信じていないからである。

ヨハ3:19 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう「裁き」[ヘー・クリシス] になっている。

ヨハ3:20 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。

ヨハ3:21 しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

ヨハ3:1 さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。

ここで「〈神の独り子の名〉を信じる」とは、〈独り子イエスが自ら歩まれた道筋において啓示された権威〉の意味と力を神の絶大なる愛と恵みとして透徹して知解し、彼の前に進み出て身を投げ出す、ということである、と筆者は理解する。

このような根源力デュナミスへの共振・信従を人間の側から拒否することは、絶対の側からの裁きを蒙らざるをえない。それは裁く神、怒る神たる父の裁きであろう。

以下は、主題が「裁き」であるとき、考察は「三位一体の神」の次元に定位せざるをえないことを示している。

2. 父の裁きと子の裁き

2.1 子は裁かない、裁くとすれば父に従うのである

8:15 あなたたちは肉に従って裁くが、わたしはだれをも裁かない。

8:16 しかし、もしわたしが裁くとすれば、わたしの裁きは真実である。なぜならわたしはひとりではなく、わたしをお遣わしになった父と共にいるからである。

5:30 わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。

わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである。」

2.2 父は子に裁きの権を与えられた

5:22 また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。

3. 十字架上の神の愛

3.1 「主は復活された」、このことを何よりも伝えたい、ルカの言語系

- A ^{24:33}そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、
 十一人とその仲間が集まって、^{24:34}本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。
^{24:35}二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。
- B ^{24:36}こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、
 「あなたがたに平和があるように」と言われた。
^{24:37}彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。
- C ^{24:38}そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。
^{24:39}わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えたとおりわたしにはそれがある。」
^{24:40}こう言って、イエスは手と足をお見せになった。
- D ^{24:41}彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、
 イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。
^{24:42}そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、^{24:43}イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。
- E ^{24:44}イエスは言われた。
 「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。
 これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」
- D' ^{24:45}そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、
^{24:46}言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。
^{24:47}また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。
- C' エルサレムから始めて、^{24:48}あなたがたはこれらのことの証人となる。
^{24:49}わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。
 高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい。」

C, C': 見たことを疑うことなく

証しなさい

D, D': 視力、知力の前での

実証、論証

B' ^{24:50}イエスは、そこから彼らをベタニアの辺りまで連れて行き、手を上げて祝福された。

24:51 そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。

A' 24:52 彼らはイエスを伏し拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、

24:53 絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。

3.2 ルカの言語系からヨハネの言語系への進展

ヨハ20:20 そう言って、お見せになった、両手と
わき腹とを、ご自分の。
喜んだ、弟子たちは、主を見て。

καὶ τοῦτο εἰπὼν ἔδειξεν τὰς χεῖρας καὶ
τὴν πλευρὰν αὐτοῖς.
ἠγάπησαν οὖν οἱ μαθηταὶ ἰδόντες τὸν κύριον.

ルカ24:40 そう言って、お見せになった、ご自分の両手と
足とを。

ルカ24:41 彼らがまだ信じられないでいる、喜びのあまり、
そして不思議がっているので、
καὶ τοῦτο εἰπὼν ἔδειξεν αὐτοῖς τὰς χεῖρας καὶ
τοὺς πόδας.
ἔτι δὲ ἀπιστούντων αὐτῶν ἀπὸ τῆς χαρᾶς
καὶ θαυμαζόντων

ヨハ20:27 「当てなさい、あなたの指をここに、そして
見なさい、わたしの両手を。
そして当てなさい、あなたの手を、
そして入れなさい、わき腹に、わたしの。

Φέρε τὸν δάκτυλόν σου ὧδε καὶ
ἴδε τὰς χεῖράς μου,
καὶ φέρε τὴν χεῖρά σου
καὶ βάλε εἰς τὴν πλευρὰν μου,

ルカ24:39
見なさい、わたしの両手を、そしてわたしの両足を。
まさしくわたしだ。
触りなさい、わたしに、そしてよく見なさい。

ἴδετε τὰς χεῖράς μου καὶ τοὺς πόδας μου
ὅτι ἐγὼ εἰμι αὐτός·
Ψηλαφήσατέ με καὶ ἴδετε,

3.3 「イエスのわき腹」への、ヨハネ共同体の注目

19:34 しかし、兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した（ヌツソーした）。

すると、すぐ血と水とが流れ出た。

19:35 それを目撃した者（ホ・ヘオラコース）が証しており、
その証は真実である。
その者は、あなたがたにも信じさせるために、
自分が真実を語っていることを知っている。

19:36 これらのことが起こったのは、

「その骨は一つも砕かれない」という聖書の言葉が実現するためであった。

19:37 また、聖書の別の所に、

「彼らは、自分たちの突き刺した者（エッケンテオーした者）を見る」

とも書いてある。

20:24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。

20:25 そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、

トマスは言った。「見なければ あの方の手に 釘の跡を、

入れてみなければ わたしの指を 釘の跡に、
また、入れてみなければ わたしの手を あの方のわき腹に、わたしは決して信じない。」

結 語

十字架上のイエスの「わき腹からの血潮」。

ヨハネ共同体がこの中に、どれほど神の、そして神の独り子イエスの、愛と恵みを読み取ったか、その感激の深さが上のように入念に表現されているのである。

かくも絶大な愛と恵みを、いまこの瞬間、受け止められない者は、神と神の独り子イエスから裁かれてしまっている、たとえイエスが自らは裁かれないとしても。

これが「イエスの裁き」についてヨハネ神学の主張するところである。

ヨハネ共同体は神と神の独り子イエスの愛と恵みに、自らの行動として、いかにして応えていくべきかを最大の課題としているのである。